

2013年5月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

生かされている自覚

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「如来寿量品」

1. 如来寿量品の概要

- (1) 釈迦牟尼世尊は、四十余年前に成仏したと世間では思っているけれども、実際には、考えも及ばないほどはるかな昔に成仏していたことを明かします。
- (2) 成仏してからずっと、娑婆世界その他で衆生を導いてきたことを明かします。
- (3) 釈迦牟尼世尊の寿命は無量であり、滅することはないことを明かします。
- (4) 良医治子の譬えを話します。
- (5) 以上を偈で繰り返します。

2. 哲学的な真理

(1) 諸法実相

「諸法」は〈私たちの感覚・知覚で認識したあらゆる現象〉という意味。「実相」は〈本当のすがた〉という意味。

「諸法実相」は〈あらゆるものごとの本当のすがた〉という意味です。

(2) 本末究竟等

「本」は太い木の根のことで〈はじめ〉を意味します。「末」は木の梢のことで〈おわり〉を意味します。「究」は〈奥底まで入り込んで確かめる〉こと、「竟」は〈最後までやり遂げる〉ことですから、「究竟」は〈究め尽くす〉という意味です。

本末究竟等は、「目に見える現象は、一定の法則によってさまざまな変化を見せるけれども、はじめ（本）からおわり（末）まですべてひとしいのである」という意味です。

(3) 「等しい」とは

① 私たちの感覚・知覚で認識するものごとは、千差万別のすがたをしていますが、すべて真理によって現れ、生かされているという意味で等しいのです。

② すべてのものごとは変化します。すべてのものごとは互いに関係しあっています。その意味で等しいのです。

③ すべてのものごとは調和しよう、向上しようとしています。その意味で等しいのです。

(4) 哲学的な真理

「本末究竟等」という理論は哲学的な真理であり、きわめて冷徹なものです。

この真理を悟っただけでは、すぐさまそれが人間の救われや生きがいには結びつかないのです。

3. 哲学・道徳と宗教の違い（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』P. 166～167）

(1) 哲学・道徳

りっぱな哲学や道徳の教えは、頭（表面の心）で「なるほどそうか」と理解するものです。すべての人が、それを理解し、そのとおり実践できれば、問題はありません。

(2) かくれた心

ところが、じっさいはなかなかそうはゆきません。〈表面の心〉ではわかっている、人間には〈かくれた心〉という始末のわるいものがある、それがしらすしらすのうちに人間を迷わせ、よくない行動をさせるのです。

(3) 宗教・信仰

ですから、この〈かくれた心〉までも清めなければ、人間は救われないのですが、それをしてくれるのが宗教であり、信仰なのであります。

（注釈：ここでの〈宗教〉は〈仏教〉のことです。〈信仰〉は〈仏・法・僧〉に帰依することです。世間には、心を清めない宗教、心を汚す信仰が蔓延していますから、気を付けなければなりません）

4. 人間に即した真理（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』P. 155～156）

(1) 仏性

「本末究竟等」という哲学的な真理を人間に即して表現すれば「人間の本質は仏性である」ということです。

(2) のみ込めない

一般に人々は「人間の本質は仏性である」と聞いても、その本当の意味をすぐに呑み込むことはできません。そこで、釈迦牟尼世尊は、さまざまな手法を使って、だんだんに人々の心をその方向に引き寄せてくださるのです。

5. 真実をうち明ける（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』P. 156～157）

(1) 真実とは

釈迦牟尼世尊は、如来寿量品で、真実をハッキリとうち明けられました。

「真実」とは〈ほんとうの事実〉〈実際の事実〉です。

(2) 真実の内容

① 仏の寿命は不生不滅です。その仏を久遠実成の本仏といいます。釈迦牟尼世尊は久遠実成の本仏です。

② 人間も、人間以外の万物も、その久遠本仏に生かされている仏の実子です。

(4) 哲学的な真理に血が通う

真実が明らかになると、冷徹で哲学的な諸法実相の悟りに、人間的な温かい血が通いはじめ、人びとは「自分は久遠の本仏の慈悲にいだかれているのだ、生かされているのだ」という、しみじみとしたありがたい思いにつつまれるようになるのです。そうになってこそ、ほんとうの幸せが生まれ、ほんとうの生きがいを感じられてくるわけです。

6. 迷い

私たちが仏の実子であるからには、本仏と同じように、万物万象を生かすはたらきをすることができるはずですが、それができないのは、ほんらいのはたらきを妨害するものが、私たち自身の中にあるからです。それを「迷い」と言います。

久遠本仏である釈迦牟尼世尊は、私たちから迷いを払拭するために、苦心惨憺してくださっているのです。

7. 良医治子の譬え（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 157～160）

(1) 名医

ある所にひとりの医師がいました。すぐれた智慧をもち、薬の処方にも熟練していて、どんな病気でも治す名医でした。

(2) 子どもたちが毒を飲む

その人にたくさんの子どもがいましたが、父の医師が所用で他国へ出かけたるすに、あやまって毒になる薬を飲んでしまいました。父が家におればそんなことは起こらないのですが、るすのあいだはしたいほうだいの生活をしているので、ついそんなことになったのです。

(3) 子供たちが苦しむ

だんだん毒がまわってくると、子どもたちは地べたをころげまわって苦しみました。

(4) 父が帰ってくる

そこへ、さいわい父が帰ってきました。子どもたちは、あるものはあまり毒がまわってはず、あるものは毒のために本心を失っているものもありましたが、それでも遠くのほうに父の姿をみつけると、一様にたいへん喜びました。

(5) 父に治療を頼む

みんな父の前にひざまずいて、「おとうさん、よく帰ってくださいました。わたくしどもはばかなことをしてしまったのです。まちがって、毒になる薬を飲んでしまいました。どうか治療してください。命を助けてください」と頼みました。

(6) 父は薬をつくる

父は子どもたちが苦しんでいるのを見て、よく効く薬草の、しかも色・味・香りのいいものを選んで、飲みやすく調合して、子どもたちにあたえました。「これはすばらしくよくきく薬だ。さあ、すぐお飲み。いまの苦しみが治るばかりか、これから先も病気ひとつしなくなるよ」

(7) 薬を飲む子と飲まない子

子どもたちのなかで本心を失っていないものは、すぐそれを飲みましたので、毒による病はすっかり治ってしまいましたが、毒が深くまわっている子どもたちは、さきほどは「病気を治してください」と頼んでおきながら、せっかくの薬を飲もうともしないのです。なぜかといえば、毒のために本心を失っているのです、その薬が色もわるく、へんな臭いがするように感じられて、飲む気になれなかったのです。

(8) 非常手段

それを見て、父の医師は考えました。「ああ、かわいそうに、毒のために心がすっかり顛倒しているのだ。しかたがない。こうなったからには非常手段をとって、この子たちがかならず薬を飲むようにしむけよう」

(9) 父の死のしらせ

そこで、父は「みんなよく聞きなさい。わたしはもう年をとって、死期が近づいている。それなのに、また用があって他国へ出かけなければならないのだ。それで、この良薬をここにおいておくから、かならず飲むのだよ」といいのこし、旅に出てゆきました。そして、旅先から使いを出して、「お父上はおなくなりになりました」と告げさせました。

(10) 本心にたちかえる

それを聞いた子どもたちは、たいへんおどろき、悲しみました。「ああ、お父さんがおられたらなあ……」という心細さが痛切に感じられてきました。すると、そのショックで、ハッと本心にたちかえることができました。

そこではじめて、父ののこしていった薬が色も香りもいいのに気がつき、さっそくそれを飲みますと、たちまち毒による病はすっかり治ってしまいました。

(11) 父が帰ってくる

ところがどうでしょう。子どもたちが治ってしまうと、死んだとばかり思っていた父が他国から帰ってきて、みんなの前に元気な姿をあらわしたのであります。

8. 煩惱の根本原因（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 161）

煩惱の起こるいちばんの根本原因をさぐってみますと、〈目に見えるもののみを実在とおもい、それにとらわれ、むさぼりの心を起こす〉ところにあるのです。

9. 縁起観（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 161～162）

(1) 縁起観

この世のすべての現象は、因と縁によって生じた仮りのあらわれにすぎません。その因と縁がなくなれば現象もなくなり、ちがった因と縁とが和合すれば、かならずそれにふさわしい現象があらわれるのです。

(2) 教え

釈迦牟尼世尊は、縁起観にもとづいて〈十二因縁〉・〈四諦〉・〈八正道〉・〈六波羅蜜〉など、いろいろな教えを説かれました。

(3) 人々が救われる

それらの教えによって、おおくの人々が迷いをのぞき、安らかな心境にたつすることができました。

10. 凡夫のために（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 162～163）

(1) りっぱな指導者

お釈迦さまのようなりっぱな指導者がいつも身近におられて、たえずそのような教えによって人びとを導いてくださるうちは無事です。

(2) 凡夫の悲しさ

そのような指導者がいなくなると、だんだんと元の木阿弥にもどっていくのが、凡夫の悲しさです。

目に見えるものしか信じられない凡夫は、目に見える仏さま（お釈迦さま）が入滅されてしまうと、つい道をふみはずすようになるおそれがあります。

(3) 教えを残す

お釈迦さまはそれを心配され、そのために、〈仏は不生不滅である〉ということをしっかり教えこんでおこうとして、この譬え（良医治子の譬え）をお説きになったのです。

たとえ指導者がいなくても、真実の教えさえのこっておれば、それで救われるからです。

1 1. 薬を飲まない衆生（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 163～164）

(1) 方便の教え

名医である仏さまは、次のような薬を調合し、凡夫にものみやすいようにしてあたえられました。これが方便の教えです。

- ・迷いをのぞく薬
- ・ほんとうの智慧を得させる薬
- ・ひとのためにつくす心を起こさせる薬

(2) 薬を飲まない衆生

本心（仏性の心）を失っている衆生は、仏さまが調合した薬を飲もうとしません。

ほんとうは香りも色も味もよい薬が、へんな臭いのする、いやな色の、不味い薬に見えるからです。

(3) 教えが窮屈に見える

五欲の楽しみにおぼれきっている衆生は、仏さまの教えがなんとなく窮屈なように感じられて、その教えの中にはいろいろとしないのです。あさはかな人間のわがままです。

（注釈：真理を知らない凡夫は、自分本位のわがままが通ること、自分の思いを人々が受け入れることなどを求めます。真理の教えは、自分本位のわがままを押しえること、自分が人々の思いを受け入れることなどを説きますから、凡夫にはなかなか受け入れられないのです）

1 2. 仏が身を隠す（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 165～166）

(1) 仏が身を隠す

仏さまは、衆生の目を覚まさせるために、一時、見えないところに身をお隠しになりました。歴史的にいえば、お釈迦さまが入滅されることです。

(2) 衆生が大指導者を求める

そうすると、人びとは、にわかになんか心細くなり、失った大指導者を恋い慕う感情が猛烈に起こってきます。

そういう痛切な思いが生ずれば、人間はかならず本心にたちかえります。

これはなんとかしなければならぬと思って、残された教えにとびついていくのです。

1 3. めざめれば仏さまが見える（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 167～168）

(1) 救われる

ほんとうに自分を救ってくれるものを、のどが渴いた人が水を求めるように求め、恋いあこがれる思いがあってこそ、その人の心は清められ、救われるのです。

(2) めざめれば仏さまが見える

この子どもたちも、父に対する恋慕渴仰の念を起こしたからこそ、目がさめたのです。ところが、目を覚まして本心にたちかえると、たちまち父は帰ってきました。

これは、衆生がハッと気がつけば、いつでも仏さまはそこにいらっしゃるのだという意味です。

(3) われわれは仏さまと一体

仏さまは不生不滅であり、一瞬たりともわれわれのそばから離れられることはないのです。いや、〈そば〉ということばもほんとうは正確ではなくて、仏さまはつねにわれわれの内にも外にも満ち満ちておられるのです。われわれは仏さまと一体なのです。

(4) 仏さまを見失う

① 仏さまが姿を消す

そういう意味の仏さまが姿を消されるというのは、われわれがそれを忘れ、見失ってしまうことにすぎないのです。

② 仏さまの本体

仏さまの本体は、この世のありとあらゆるものを生かしておられる久遠実成の本仏です。ですから、その本仏のみ心のとおり生きておれば、心は自由自在であり、いつもしあわせにしておられるのです。

③ 苦しみを招く

久遠実成の本仏に生かされていることを忘れてしまうために、わがままな行ないをして、そのためにみずから苦しみを招いているわけです。

1 4. 生かされている自覚（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 169）

(1) 真実を悟る

如来寿量品の教えから、つぎの真実を学びたいと思います。

① 「いつも自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ」という自覚を深くもつ。

② 「久遠本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のとおりに生きることが正しい生きかただ」という明快な真実を悟る。

(2) ほんとうの人間らしい生きかた

本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、常に大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです。

（注釈：大自信とは、自分は久遠実成の本仏に生かされているのだから、久遠本仏のみ心のとおり実践していればよいのだという確信を持つことです）